

子どもと環境

父とまんとみ幼稚園

近藤千恵子

そのような父が、幼稚園設立をおもいたったのだから、その設計にかける夢は大きかったのだらうと思う。こども達と保育者の健康がまもられる園舎、こども達が仔犬のように走りまわれる安全な園庭、父のおぼろげな設計図は、すばらしいスタッフとの出会いによって実現されることになった。

まんとみ幼稚園は、昭和四十四年

設計・建築……林 雅子

家具遊具……垂見健三・万喜子

暖房……山越邦彦

施工 尾身工務店

によって完成した。

大学時代には馬術を楽しんだと云う、動物好きな父は、長い闘病生活を経験していた。日課であった散歩の途中、西日の当る犬小屋や、陽の当たらない鶏舎の中の元気のない生き物をみるのは、父にとって辛い事らしく、「これでは病気になりますよ。」と、幼い私に話しかけてきたことを記憶している。

「飼育は良い飼育舎を作ることから始めよ。」が、父の持論であった。

林雅子氏は、先年、女性として初の建築家賞を受賞されたが、病床にいた父は、当時を想い出して、受賞を当然の事と納得しながら、心からお祝いの気持ち言葉を言葉にしていた。父と同期で遙かにご健康で第一線で御活躍していらっしやった山越先生が、父より先に逝かれた事は、大変淋しく残念な事である。

「入口」と「管理棟」

幼稚園の敷地は、東京下町の亀戸と云う悪い環境にある。東側に公園が隣接しているのは救いだが、西側は民家、南北は道路で、北側正面道路は、南側道路より一、三米低いと云う、海拔ゼロ米地帯の特徴をもっている。設計者は、此の地形を見事に利用して、入口サブポーチを作った。北側道路に面した正面入口サブポーチから、階段を数段昇ると園庭がひらけ、更に数段昇ると管理棟に入れる。入口サブポーチに乗っかっているのが管理棟である。このレベル差は、交通量の多い道路から、幼稚園のプライバシーを作りだし、管理棟を全体を見渡すのにほどよい高さに置くのに役立っている。誠にすばらしい設計者の力量が光っている所だと思う。

サブポーチは幅二〇米奥行き五米の広さで、こども達の登園を快く受けいれ、園庭に、保育室にと導く。さりげないただずまいでありながら、毎朝の第一歩を踏み出す大切な役割を果たしている。お母さんをはっきりさせる

程の速さで「おはよう」もそこそこに園内に消えてゆくことももあるが、

「はやくお迎えきてね。」

「はい、一番にきますよ。」

と、おさまりの約束を交わすお母さんともどもいる。時刻がきて門を閉めると、雨天の日は、特に格好の外あそびのスペースとなって賑わう。階段の中央が石のすべり台になっていて、ゼットコースターごっこ、ロープクライミングごっこ、ワニごっこ、物をすべらせる遊び、などが繰り返される。年少のこどもには感覚的な遊びの喜びが、年長のこどもにはスリリングな冒険が試みられている。

でこぼこに並んだ保育室と「屋外保育室」

敷地の西側に、五つの保育室がでこぼこに並んでいる。一列に整然と並べれば、園庭として遙かに広い空間を残すことができたろうに、此のムダとも思える発想が、設計者に感謝する二番目の場所である。

でこぼこ配置の結果、保育室には、屋外保育室と呼ぶ室内と同じ広さの石畳がついていて、そこに砂場と水場がある。砂や水と云う最高の遊びの素材が、保育室の延長と考えられる場所に用意されている事への感謝は、近年、高層住宅に住むことも達を多く迎えるようになって、一層深く感じている。屋外保育室と云うプランは、住宅が高層化することを予見して、こども達が戸外の生活に抵抗なく親しめるようにとの、設計者の配慮だったのかもしれない。常識的には、室内でもたれる事の多い製作活動も、屋外保育室に机を出したり、ゴザを敷いたりして続けられると、それは幼稚園中の者の目に触れて、遊びたい者を仲間にしてゆく、こゝは大変ひらかれた場所である。反面、建物のでこぼこ配置の結果うまれた、見通せない陰の部分もあって、こども達が好んで選ぶ遊び場、となっている。

保育室をつなぐ「小さなくぐり戸」

保育室は、ひとつひとつの独自性を保って運営する事

を期待された設計者であったが、何かの便利があるかもしれないと、建築の終りの段階で、保育室と洗面所が接している部分に、小さなくぐり戸が作られた。小さくしたのは、鉄の筋交いが入っていて、これ以上の大きさは作れない事情だったからである。

体をまげて小さなくぐり戸を通り抜けると、違う世界がひらけるように思えて、こゝは私の好きな場所のひとつである。此の思いはこどもにもあるようで、目的があつてすいすいと通過するこどもがいるかと思うと、くぐった所に立ち止って、新しくひらけた世界を隅からすみまで見まわして、再び自分のいた洗面所の方向に戻っていくこどもがいる。この小さなくぐり戸は、こどもの往き来と共に、こどもたちの情報が行き交う通路であつて、こんな風にご利用される事もある。

節分の鬼の役を演じようとしている年長のこども達は、管理棟に集って相談を始めた。こゝは、何かの目的、例えば誕生会の当番などで、保育者とこども達が活動する秘密の作戦場として利用される。

「こわくて、誰だかわからないような鬼になろう。」と、口々に云うことも達。自分の役を決め、イメージをはっきりさせながら、道具を使ったり、演出効果を考えたりして、自分の姿を第三者の目でみようとしている。保育者は、完成したイメージを与えるのではなく、時間をかけ、自由な気もちでこども達の創作を手伝う。各々の思いで出来あがった鬼達は、自信満々、くぐり戸狭しと保育室の弟妹の前に姿をみせてくれたのである。

小さなくぐり戸には、やはり、何か神秘的な力があるように思われる。

「床暖房」

十二月に入り、床暖房が始まると、幼稚園中が茶の間になったようなやわらかな空気で満たされる。毛布をかけてこたつを作り、カード遊びで朝のウォーミングアップをすることもたちや、洗面所のタオルを這いまわって、温水プールごっこを始めることも達もいる。

私は此の季節がめぐってくる度に、山越先生の純粹に

子ども達を愛した優しい笑顔を思い出して、感謝の気持ちでいっぱいになる。こども達が出入口の戸を開け放しにしても、輻射熱による暖房なので大丈夫、衣服を脱いで便所を使う小さいこども達をゆったりと受け止めてくれる。一年中上ばきを使わず、素足が一番気分のよい事を、こども達はよく知っているのである。家庭に近い味わいをもった幼稚園にしたい、と云う私の願いは、山越先生の床暖房によって叶えられたと云える。

気品あるデザインの椅子・机・ロッカーなどは、天童木工の特別注文品として、入念に造られているのだから。毎日休む事なく、こども達の命ずるまゝに、基地になったり、乗り物になったり、こどもと一体となってあそんでいる。安心して、満足して使える物と共にいる事の幸わせは、何者にも替えられない喜びだと思ふ。

誕生から十五年を経過し、延べ一千人程のこども達や保育者が暮らした幼稚園に、「まだまだ元気です、故障しないでくれ」とお願いしたい。

(東京・まんとみ幼稚園)